

万葉集の恋歌をよむ

平成二十六年十一月十三日 前橋西高等学校

群馬県立女子大学教授 北川 和秀

A. 一途な思い

- ① 夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ (八・一五〇〇) 大伴坂上郎女
- ② かくばかり恋ひむものぞと知らませば遠くも見べくありけるものを (二一・二三七二) 柿本人麻呂歌集
- ③ 信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ (二四・三四〇〇) 東歌(信濃)
- ④ 梅の花降り覆ふ雪を包み持ち君に見せむと取れば消につつ (一〇・一八三三) 作者不明
- ⑤ 磯城島の日本の国に人二人ありとし思はば何か嘆かむ (一三・三二四九) 作者不明
- ⑥ 一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも (六・一〇一四) 橘文成

B. 人の目・人の噂

- ① 暫くも見ねば恋しき吾妹子を日に日に来れば言の繁けく (二一・二三九七) 柿本人麻呂歌集
- ② 心には燃えて思へどうつせみの人目を繁み妹に逢はぬかも (二二・二九三二) 作者不明
- ③ うつせみの人目繁けばぬばたまの夜の夢にを継ぎて見えこそ (二二・三一〇八) 作者不明
- ④ あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて妹待つわれを (二二・三〇〇二) 作者不明

C. 通う男の気持ち

- ① 足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通はむ (二四・三三八七) 東歌(下総)
- ② 妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨も降らぬか其を因にせむ (二一・二六八五) 作者不明
- ③ 思はぬに到らば妹が嬉しきと笑まむ眉引き思ほゆるかも (二一・二五四六) 作者不明

D. 来ない男

- ① 春雨に衣はいたく通らめや七日し降らば七日来じとや (一〇・一九一七) 作者不明
- ② 陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを (三・三九六) 笠女郎
- ③ 相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額つくごとし (四・六〇八) 笠女郎
- ④ 相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えず祈誓ひて寝れど (二一・二五八九) 作者不明

E. 誇張した表現

- ① 君が目を見まく欲りしてこの二夜千歳の如く吾は恋ふるかも (二一・二三八一) 柿本人麻呂歌集
- ② 八百日行く浜の沙もわが恋にあに益らじか沖つ島守 (四・五九六) 笠女郎
- ③ 一重のみ妹が結ばむ帯をすら三重結ぶべくわが身はなりぬ (四・七四二) 大伴家持
- ④ 朝影にわが身はなりぬ玉かぎるほのかに見えて去にし子ゆゑに (二一・二三九四) 柿本人麻呂歌集
- ⑤ 外にゐて恋ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鴨にあらましを (四・七二六) 大伴坂上郎女
- ⑥ かくばかり恋ひつつあらずは朝に日に妹が履むらむ地にあらましを (二一・二六九三) 作者不明

F. 旅の別れ

- ① 梳も見じ屋中も掃かじ草枕旅行く君を齋ふと思ひて
 (一九・四二六三) 作者不明
- ② わが旅は久しくあらしこの吾が着る妹が衣の垢づく見れば
 (一五・三六六七) 遣新羅使人
- ③ 君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ(一五・三五八〇) 遣新羅使人の妻
- ④ 草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも
 (一二・三一八四) 作者不明
- ⑤ 蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ
 (二〇・四三五七) 上総防人
- ⑥ わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず
 (二〇・四三二二) 遠江防人
- ⑦ 吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむわが妻かなしも
 (二〇・四三三三) 駿河防人
- ⑧ 色深く背なが衣は染めましを御坂たばらば清かに見む
 (二〇・四四二四) 武蔵防人妻
- ⑨ 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しき物思もせず
 (二〇・四四二五) 防人妻(昔年)
- ⑩ 君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも
 (一五・三七二四) 狭野弟上娘子
- ⑪ 畏みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ
 (一五・三七三〇) 中臣宅守
- ⑫ 帰りける人來れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて
 (一五・三七七二) 狭野弟上娘子
- ⑬ わが背子が帰り來まさむ時の為命残さむ忘れたまふな
 (一五・三七七四) 狭野弟上娘子

G. 死別

- ① 降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに
 (二・二〇三三) 穂積皇子
- ② 悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを
 (五・七九七) 山上憶良
- ③ 吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき
 (三・四四六) 大伴旅人
- ④ 福のいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が声を聞く
 (七・一四一一) 作者不明

H. 夫婦愛

- ① つぎねふ 山背道を 他夫の 馬より行くに 己夫し 歩より行けば 見るごとに 哭
 のみし泣かゆ 其思ふに 心し痛し たらちねの 母が形見と わが持てる 真澄鏡に
 蜻蛉領巾 負ひ並め持ちて 馬買へわが背
 (一三・三三三四) 作者不明
- ② 真澄鏡持てれどわれは験なし君が歩行よりなづみ行く見れば(一三・三三二六) 作者不明
- ③ 馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ(一三・三三一七) 作者不明
- ④ わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後
 (二・一〇三三) 天武天皇
- ⑤ わが岡の霏に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ
 (二・一〇四) 藤原五百重娘
- ⑥ わが背子と二人見ませば幾許かこの降る雪の嬉しからまし
 (八・一六五八) 光明皇后
- ⑦ 君がため手力疲れ織りたる衣ぞ 春さらばいかなる色に摺りてば好けむ
 (七・一二八二) 柿本人麻呂歌集